

## ストレスプロセスにおける人生の意味・目的意識の検討 ——PIL テストおよび SONG テストの構成概念妥当性の検討——

山口 浩\*, 佐藤 正恵\*, 織田 信男\*, 早坂 浩志\*\*

### 【目的】

Viktor Emil Frankl (1905-1997) はよく知られているように、オーストリアの精神科医でありロゴセラピーと実存分析の創始者である (Frankl, 1995; ルーカス, 2002)。Frankl (以下フランクル) によれば人間は本源的な動機として「意味への意志」をもち、この意味への意志により、人生における「体験価値」や「創造価値」、「態度価値」の実現を図っていくことができるとしている (Frankl, 1969)。本論文で扱う PIL (Purpose-in-Life) テストはこのフランクルのロゴセラピーの考え方に基づいて、アメリカの Crumbaugh, J. C. & Maholick, L. T. (1964, 1969) が考案した心理テストである (佐藤, 1998)。この PIL テストは、人生の意味や目的を当人が今どのくらい「見出している」と思っているのかその程度を問うものである。言い方を変えれば、人生の意味や目的を見いだせないときに感じる「実存的空虚感」の程度を測ることを目的にしたテストである (Crumbaugh & Maholick, 1969)。この PIL テストは1993年に PIL 研究会により PIL テスト日本版とし日本向けに標準化され、さらに PIL テストの理論と応用についてハンドブックが出版されている (佐藤ら, 1998)。また本論文で扱う SONG (Seeking-of-Noetic-Goals) テストは Crumbaugh (1977) により開発された心理テストで、人生の意味や目的を今どのくらい「見出したい」と思っているのか、その動機づけの強さを測ろうとするものである。Crumbaugh (以下、クランバウ) によれば SONG テストは PIL テストを補う位置づけのテストだとされる。

さて、現代社会はストレス社会だといわれて久しいが、心理社会的ストレスサーに出会ったとき、そこに人生の意味や意義を見いだす場合 (人) はそのストレスサーに耐えることができる、ないしはストレス反応が低く抑えられることが考えられる。これは、究極的にはフランクルの言う「態度価値」の問題となろう。すなわち、人生の不条理や理不尽さ、苦悩といったものが襲ってきたとき (大変な心理社会的ストレスサーだと考えられる) でも、フランクルによれば対する人間の精神次元<sup>1)</sup>で取りうる態度は自由であり、どのような態度を取るかによって「態度価値」を実現でき、そこに人生の意味を見出すことができるとしている。すなわち人生の意味や目的を見出すことによって、あるいはそれらを持つことによって、心理社会的なストレスサーを乗り越えることができると考えられる。

この点について千葉 (1993) はコンピューター工場の従業員1609名 (ソフト開発・ハード設計・部品製造・管理事務を含む) にストレス関連調査および PIL テストを実施し、PIL テスト得点 (PIL の part-A 合計点) の高い人、すなわち人生の意味や目的をもち、自分の人生を意味あるも

\* 岩手大学人文社会科学部 人間科学講座, \*\* 岩手大学保健管理センター 学生相談室

1) フランクルは人間の在り方を考察する際に、生物次元、心理次元、精神次元を区別し、精神次元は人間固有の次元だとしている (例えば Frankl, 1969; ルーカス, 2002)

のと感じている（すなわち生きがいを感じている）人は、種々のストレス反応が低く抑えられること、ストレスラーの頻度が高くなっても、ストレス反応の上昇が低く抑えられることを示している。この千葉（1993）の報告は、ストレス研究の文脈からすれば、事例研究的に言われている人生のいきがい感とストレス反応の関係を統計的に示した意義ある研究だと考えられるし、心理測定学の観点から言えば PIL テストの妥当性に関わる構成概念的妥当性をさらに確認したことになる。

さて、上記で触れたように、クランバウによれば SONG テストは PIL テストを補うテストであり、人生の意味や目的をどのくらい見出したいと思っているのかその動機づけの強さを測っているとされる。しかし、その妥当性については議論の分かれるところであり、Crumbaugh（1977）や Reker & Cousins（1979）は妥当性ありとするが、例えば Dyck（1987）などは厳しい批判を行っている。Dyck（以下、ディック）の批判の一つに、SONG は人生の意味や目的を見つけたいとする動機づけの強さを測るとしているが、ディックに言わせれば、クランバウの説明では、その動機づけはあたかも飢餓動機と同様な欠乏動機づけの説明になっており、フランクルの見解と相容れないのではないかと。フランクルは、意味を求める意志である「意味への意志」は、ホメオスタシス性の（欠乏）動機ではないと述べている（Frankl, 1967）。確かに、クランバウによれば、SONG は PIL と負の相関をもち、意味・目的を見出していない人は探そうとする動機づけが高くなるが、意味・目的を見出している人はそれ以上に意味・目的を探そうとする動機づけは弱いだろうと述べており（Crumbaugh, 1977）、欠乏動機づけを類推させる。しかしフランクルのいう意味への意志は、自分の人生の意味や目的を見出したとしても減ってしまうようなものではなく、さらに意味や目的の実現のためにその動機づけは持続するのではないかと考えられる。例えば大学生が毎日の生活に充実感を感じず、自分が今大学で勉強している意味は何だろうと疑問を持つ場合、そのむなしさを解消したい、あるいは自分の存在意義や人生の意味や目標を見出したいという気持ちから学生相談室の戸をたたくということがある（山口, 1993）。カウンセリングの結果、自分が大学に進学した意味や目的を再認識したり、あるいは将来の目標を見出した後でも、「今、人生の意味や目的を見出したに過ぎません、これからその実現に向かって努力していきたい」とか「一步一步努力することに意味がある」など、動機づけがさらに持続したり強まったりする一群が確かに存在する<sup>2)</sup>。

これらの点や本来の SONG の構成概念妥当性の観点からすれば、SONG テストに欠乏動機づけ的な成分（意味・目的を見出していないから見出したい）を含むことがあったとしても、少なくとも、意味・目的を見出した後にもさらに意味・目的の実現に向けて持続する動機づけ成分が含まれなければならないと考えられる。

現在、SONG テストの標準化には PIL 研究会が取り組んでいる（山口ら, 2000a; 2000b; 斎藤ら, 2001; 田中ら, 2004 予定）。山口ら（2000b）また斎藤ら（2001）によれば、SONG テストはクランバウの主張から考えられる一因子構造とするよりは、人生の意味・目的の「欠如」に関する因子（Lack; L 因子）と更に（新たに）意味・目的に挑戦したいとする「意欲」に関する因子（Conation; C 因子）の二因子構造を考えた方が良さそうだとしている<sup>3)</sup>。

2) 筆者らのカウンセリング経験の中で、そのようなクライアントに出会うことは多い。特に山口は、相談室を訪れた来談学生の PIL-BC 分析（PIL テストには、刺激語に対する文章完成法および自由記述部分である Part-BC 部分があり、PIL 研究会が開発した BC 分析法に基づいて分析を行う）の中で上記のような記述に多数出会った経験がある（山口・佐藤, 1993）。

3) なお、PIL 研究会からの私信によれば、第一因子の L 因子はその後、実存的渴望因子（M 因子）、第二因子の C 因子は意味探求因子（A 因子）と呼称変更が検討されている。特にこの第二因子である C 因子が SONG の構成概念妥当性を考える際に重要になってこよう。

さて、ストレス研究の分野で、SONGを使用した報告は少なくとも日本ではまだない。従って、このSONGがストレス反応とどのような相関関係を持つのかは不明であるが、その構成概念から考えれば、また、山口ら（2000b）や斎藤ら（2001）が主張する二因子構造を考えれば、L（欠如）因子が高ければストレス反応は高いという正の相関が、またC（意欲）因子が高ければむしろストレス反応は弱くなるという負の相関が得られるのではないかと考えられる。つまり、C因子は常に人生の意味を深めていきたいということなので、意味を十分見出していないときばかりでなく、すでに見出した後でも更に深く追求したいという方向性が考えられ、ストレス反応との結びつきは弱いながらもストレス反応の軽減に結びつくと考えられる。

もし、L因子、C因子に関してストレス反応との関係が予測通りであれば、SONGテストは欠乏動機づけのような一因子構造の尺度ではなく、C因子を含む二因子構造として取り扱った方がよく、Dyck（1987）の批判を一部かわすことができよう。

このような議論を踏まえ、本論文では、まずSONGの妥当性検討の一つとして、大学生のストレス反応に対するSONGの二因子的関わりを検討したい。また、PILテストの結果もはたして予測通りにストレス反応の軽減と対応しているのか検討したい。これらの検討はとりもなおさず、両テストの構成概念妥当性を検討することになる。

さて、ストレス研究において、その研究アプローチには大きく3つのタイプを分類することができる。それは、出力型のストレス研究（反応としてのストレス）、入力型のストレス研究（刺激としてのストレス）、相互作用型のストレス研究（関係としてのストレス）である（島津，2002）。第一の出力型のストレス研究の例はセリエのストレス研究のタイプであり、第二の入力型のストレス研究はホームズらの社会再適応評価尺度に関する研究が代表的である。それに対して、第三の相互作用型のストレス研究はLazarusら（例えば、Lazarus & Folkman, 1984; ラザルス，1990）によって主張される研究アプローチであり、環境と個人の相互作用を考慮にいたしたストレス研究である。そこでは、ストレスラー、それに対する認知的評価、その後のストレス対処、その結果としてのストレス反応といった一連のストレスプロセスが考えられている。本研究のように、ストレス反応と、PILやSONGが測っていると考えられる人生の意味や目的意識を結びつけて考えるとすれば、当然、この第三の相互作用型ストレス研究の立場をとる必要があろう。そのためには、できるだけPILやSONGの得点をストレスプロセスの中で考えることが重要であり、ストレスラーや認知的評価、対処方略、といった他の変数とともに位置づけることが必要であろう。このストレスプロセスの中で、PILやSONG得点がストレス反応に対して予測通りの関係を持つかを検討することで、PILやSONGの構成概念妥当性を考察していくことにしたい。

## 【方法】

PILやSONGテストを他のストレス関連の質問紙と同時に下記の要領で施行した。

- (1) 調査日時：2002年6月11日～7月1日。集合調査法により実施。
  - (2) 対象者：全学共通教育科目「適応の理解」受講生。4週にわたって実施。第1週と第3週ともに回答した140名（男121，女19）を分析。年齢は平均19.1歳（SD；1.35，18～28歳）。1年生73人，2年生50人，3年生14人，4年生以上3人。
  - (3) 使用した質問紙および実施時期
- 使用した質問尺度の具体的意味内容については、表1に示したとおりである。

表1 使用した質問尺度の内容

テストの種類	下位尺度または合計	尺度の意味内容
ストレッサー頻度	合計	ストレス状況に対して、負担、いろいろなどの頻度大
ストレス感	合計	ストレス状況に対する、負担やいろいろ感が強い
認知的評価 (CARS)	コミットメント	この状況を改善するために努力しようと思った。
	影響性	この状況は私に影響を与えるぞと思った。
	脅威性	この状況は私の生活を脅かすな—と思った。
	コントロール可能性	この状況への対処の仕方が分かるぞと思った。
対処方略尺度 (TAC-24)	問題解決・サポート希求	人に聞いて、気を静め、計画を立てて対処しよう。
	問題回避	もうあきらめて、責任転嫁をしよう。
	肯定的解釈と気そらし	気晴らしをして忘れよう。きっといいこともあるさ。
心理的ストレス 反応尺度 (PSRS-50R)	情動領域	うつ、不安、怒りなどの感情が強い。
	意欲領域	自信喪失、無気力、絶望感が強い。
	思考領域	思考力低下、侵襲的思考が強い。
	対人領域	引きこもり、依存、対人不信が強い。
	合計	その状況に対して上記反応を強く体験した。
SONG テスト	欠如(L)因子	人生の意味・目的を今見出せずとまどっている。開き直ってはいない。
	意欲(C)因子	人生の意味・目的を見出している、もっと見出したい。本当の意味を見出したい。
	合計	人生の意味・目的追求への動機づけが高い。
PIL テスト	合計	今、人生に意味・目的を見出している。生きがい感あり。

①PIL テスト：PIL-A 部分は7段階評定の20項目、PIL-BC 部分は文章完成法および自由記述部分である。今回は PIL-A 部分を分析対象とし、その合計点を PIL 得点とした。②SONG テスト：7 段階評定の20項目。PIL 研究会は暫定的に2因子構造を考えており、それは人生の意味・目的の欠如感が動機づけにつながる「欠如(L)因子」と、意味・目的のさらなる探求への意欲が動機づけにつながる「意欲(C)因子」である。因子を構成する項目は、山口ら(2000b)に従い、それぞれ素点を合計し因子ごとの得点を出した。

なお、PIL と SONG は第1週目に実施した。

以下の③～⑧の質問尺度はB4版3枚にまとめ、「大学生の日常生活に関する調査」として第2週目から実施。その際第3週目に、ここ半年間の「学業状況」について、質問紙③～⑧の尺度に答えさせた。第2週目、第4週目は別のストレス状況をあげ、それについて同様の質問尺度に答えさせた。今回は第3週に行ったこの「学業状況」へのストレスについてのみ報告する。

③ストレッサー頻度測定 of 6 項目：ストレスフルな出来事の体験頻度を5段階評定させた。学業状況に対して6項目(負担になったこと、いろいろしたこと、はらはらしたこと、おろおろしたこと、ストレスになったこと)ごとの頻度を聞いた。この6項目の合計をストレッサー得点とした。

④ストレス感測定 of 6 項目：ストレスを感じた程度(強度)を5段階評定で問うもの。質問文は上記③で使用した6項目と対応させ、感じた強度を評定させた。そのうえで、6項目の合計点を算出した(なお、今回は分析の対象外とした)。

⑤認知的評価測定尺度 (CARS) の 8 項目：鈴木・坂野 (1998) によって作成されたもの。5 段階評定させた。4 つの下位尺度から構成される。4 尺度とは、「コミットメント」、「脅威性の評価」、「影響性の評価」、「コントロール可能性」である。各下位尺度ごと (2 項目ずつ) の合計点を出した。

⑥三次元モデルにもとづく対処方略尺度 (TAC-24) の 24 項目：神村ら (1995) によって作成されたもの。5 段階評定をさせた。神村らは対処の機能は 3 軸の階層構造から説明可能とし、この 3 軸の組み合わせによって説明される 8 下位尺度から構成される。この 8 尺度 (因子) には相互相関の高いものが含まれ、さらに二次因子分析を行い以下の 3 因子が得られている。この 3 因子「問題解決・サポート希求」、「問題回避」、「肯定的解釈と気そらし」ごとの合計点を出し分析対象とした。

⑦リフレーミング方略測定項目の 40 項目：前川 (2002) によるもの。今回は分析の対象にはしなかった。

⑧心理的ストレス反応尺度 (改訂版) の 50 項目 (PSRS-50R)：新名 (1994) によって作成されたもの。5 段階評定。「情動」、「意欲」、「思考」、「対人」の 4 領域を含む。今回は全項目による合計点を得点としたが、必要に応じて 4 領域それぞれの合計点を使用した。

なお、統計解析ソフトウェアには SPSS (ver. 11) を使用した。

## 【結果と考察】

表 2 に、各尺度の平均値、標準偏差および本来の得点範囲を示した。

### (1) 強制投入法による重回帰分析

学業状況に対する心理的ストレス反応得点 (PSRS-50R) を従属変数とし、ストレスラー頻度得点、認知的評価の 4 尺度、対処方略の 3 尺度、SONG の 2 尺度、PIL-A の合計点をすべて独立変数として強制投入し、重回帰分析を行った。

その結果、表 3 に示したように偏回帰係数が有意 ( $p < .05$ ) なものとして、ストレスラー頻度、認知的評価・脅威性、対処方略・問題回避、SONG・欠如因子、PIL 合計点があげられた。また、有意傾向 ( $p < .1$ ) が見られたものとして、SONG・意欲因子があげられた。標準偏回帰係数の符号を考慮して解釈するならば、次のようにまとめることができよう。すなわち①ストレスラー頻度が高いときにはストレス反応は強い、②認知的評価の脅威性が高いときにはストレス反応は強い、③対処方略で問題回避するときにはストレス反応は強い、④SONG の欠如得点が高いときにはストレス反応が強い、⑤SONG の意欲得点が高いときにはストレス反応は弱い傾向、⑥PIL の得点が高いときにはストレス反応は弱い、ことが示された。

これらの①～③については、ストレスのプロセス研究の中でよく納得できるものであろう。

また、PIL テストに関しては、千葉 (1993) が指摘するように、PIL 得点の高い人すなわち人生の意味・目的をつかんでいる人は、ストレス反応が低く抑えられるという指摘と軌を一にする結果が得られている。すなわち大学生の学業ストレスについても PIL テストはその構成概念から予測される方向で結果を示しており、心理測定学の観点から言えば、PIL テストはそれだけ構成概念妥当性の高い心理テストだと考えられる。では、SONG についてはどうであろうか。クランバウが指摘する PIL との弱いないしは中程度の負の相関があるという点については、今

表2 各尺度の平均値、標準偏差および本来の得点範囲

テストの種類	下位尺度ないし合計	平均値	標準偏差	点数範囲
ストレッサー頻度	合計	13.8	5.7	0-24点
ストレス感	合計	13.2	5.8	0-24点
認知的評価 (CARS)	コミットメント	4.9	2.0	0-8点
	影響性	5.0	2.2	0-8点
	脅威性	3.3	2.5	0-8点
	コントロール可能性	4.3	1.9	0-8点
対処方略尺度 (TAC-24)	問題解決・サポート希求	14.3	7.1	0-36点
	問題回避	4.6	4.3	0-24点
	肯定的解釈と気そらし	13.2	5.7	0-36点
心理的ストレス反応尺度 (PSRS-50R)	情動領域	30.3	17.7	0-72点
	意欲領域	18.5	11.8	0-48点
	思考領域	12.5	7.8	0-32点
	対人領域	15.3	10.0	0-48点
	合計	76.0	44.7	0-200点
SONG テスト	欠如 (L) 因子	41.3	11.2	12-84点
	意欲 (C) 因子	32.9	9.8	8-56点
	合計	74.2	19.1	20-140点
PIL テスト	合計	82.7	20.9	20-140点

表3 重回帰分析(強制投入法)の結果

モデル	非標準化係数		標準化係数	t	有意確率
	偏回帰係数	標準誤差	標準偏回帰係数		
(定数)	6.511	18.218		.357	.721
ストレッサー頻度	2.370	.611	.303	3.880	.000
認知的評価・コミットメント	1.831	1.750	.083	1.047	.297
認知的評価・影響性	1.212	1.579	.060	.768	.444
認知的評価・脅威性	3.124	1.370	.172	2.281	.024
認知的評価・コントロール可能性	-1.392	1.493	-.059	-.933	.353
対処・問題解決サポート希求	.456	.454	.073	1.004	.317
対処・問題回避	1.704	.717	.164	2.378	.019
対処・肯定的解釈と気そらし	.788	.519	.101	1.518	.132
SONG・欠如因子	.928	.302	.243	3.068	.003
SONG・意欲因子	-.562	.309	-.124	-1.816	.072
PIL-A・合計	-.325	.146	-.152	-2.223	.028

回、PIL と SONG (合計) 得点の間の相関は  $r = -0.341$  ( $p < .01$ ) であり、予測通りであった。また、PIL 合計と欠如 (L) 因子の相関は  $r = -0.476$  ( $p < .01$ )、意欲 (C) 因子との相関は  $r = -0.119$  (*ns*) であり、やはり意欲因子は PIL 得点ともあまり関係しない、SONG 独自の因子だと考えることができる。その意欲因子はストレス反応に対して傾向程度ではあるが負の偏回帰係数をもった。この点、意欲的に意味を探求しようとする人たちは、すでに人生の意味や目的を持っているとか持っていないに関わらず、ストレスに前向きにチャレンジ (挑戦) をし、その結果ストレス反応が低く抑えられるのではないかと、といった解釈を考えることができよう。この解釈は SONG テストの有用性や意義を高めることになる。

では、次にストレスプロセスの中で、ストレス反応を説明する説明力の高い変数はどれかを検討する目的で、ステップワイズ法 (SPSS Ver. 11) による重回帰分析を行ってみた。

## (2) ステップワイズ法による重回帰分析

上記と同様に、心理的ストレス反応得点を従属変数とし、他のものを独立変数の候補となる変数として分析を行った。SPSS プログラムによるステップワイズ法では、各変数の F 比の有意確率が 5% 以下であればその変数を投入し確率 10% 以上であれば除去される。その結果を表 4 にまとめる。

表 4 ステップワイズ法 (重回帰分析) による結果のまとめ

選出された変数	標準偏回帰係数	t 値	有意確率	最終モデル集計
ストレスナー頻度	0.397	5.505	$p < .001$	R=0.774, $R^2=0.599$ , 調整済み $R^2=0.589$ . モデルとしての F 値 (4,135) =50.369 ( $p < 0.001$ )
対処・問題回避	0.234	4.064	$p < .001$	
SONG・欠如	0.229	3.602	$p < .001$	
認知評価・脅威	0.197	2.858	$p < .001$	

表 4 から、独立変数として最終的にストレスナー頻度、対処方略の問題回避方略、SONG の欠如因子、認知的評価の脅威性が選出され、これらの各変数の得点が高いときには心理的ストレス反応が強いということになる。特にこの中で SONG の欠如因子が残ったことは注目し値する。この欠如因子は Dyck (1987) の考えを敷衍すれば SONG の構成概念に反する因子となろうが、ステップワイズ法によれば PIL 得点よりストレス反応 (正確には大学生の学業ストレス) への説明力が高いということになり、実際の臨床現場では有用な因子になりうるかもしれない。確かに、現在人生の意味や目的も見出しはせず、早く見出したいと思っている人は、それだけいらしたり焦ったりしていることが考えられ、当然ストレス反応も高いことが想像される。そういう学生には早めのカウンセリングが必要かもしれない。

ただし、SONG の妥当性検討の点から言えば、欠如因子が結果的にどのような性質をもった因子であるか、さらに検討が必要である。例えば他の精神病理学的変数 (例えば抑鬱や不安など) との相関を検討することが重要であるが、今回はその種の質問紙を施行していないので現時点で十分な検討はできない。ただし、今回使用した心理的ストレス反応尺度は、表 1 に示したように 4 つの下位領域 (情動領域、意欲領域、思考領域、対人領域) を含んでおり、それぞれの領域合計点との関係を検討することは可能である。そこで、ここでは PIL 得点、SONG の二因子の得点のみに注目しそれらを独立変数とし、心理的ストレス変数の各領域を従属変数として、4 つの重回帰分析 (強制投入法) を実施した。

## (3) 心理的ストレス反応の4領域に対する PIL および SONG テストの関係の検討

心理的ストレス4領域をそれぞれ従属変数とし、PIL 得点、SONG の二因子の得点を独立変数として4つの重回帰分析を行った。その結果を表5に示す。これらの結果から、SONG の欠如因子は、特に情動領域（うつ、不安、怒りなどの感情が強い）での影響力が大きいものと思われる。これに対して、PIL 合計は意欲領域（自信喪失、無気力、絶望感が弱い方向）での影響力が大きいと考えられる。なお、SONG・意欲因子はいずれの領域でも有意な影響力を持たなかった。

表5 各心理的ストレス反応領域を従属変数としたときの各独立変数に対応する標準偏回帰係数

独立変数	← 従属変数の4種 →			
	情動領域	意欲領域	思考領域	対人領域
(調整済み R <sup>2</sup> )	0.261**	0.316**	0.197**	0.199**
PIL	-0.093	-0.400**	-0.212**	-0.224**
SONG・欠如	0.533**	0.295**	0.298**	0.303**
SONG・意欲	-0.091	0.001	0.073	0.055

\*\* :  $p < 0.01$

これらの点から、SONG・欠如因子は情動面への影響が大きく、下手をすれば不安・抑鬱などの情動変数が、欠如因子と情動領域の心理的ストレス反応に共通に強い影響をおよぼし、その結果としての高い疑似相関が現れているのかもしれない。今後、不安や抑鬱尺度との相関をとったり、それらの尺度を重回帰分析に組み込むなどして、検討する必要があるだろう。

また、SONG の意欲因子については、ストレスプロセスに含まれる多くの変数の中に組み込んだ時、心理的ストレス反応に対して、傾向程度の説明力を持つことが分かったが、PIL 得点や SONG・欠如因子に比較して影響力が低かった。この点、SONG における意欲因子なるものは臨床現場で心理査定上、有用な因子になるのか、あるいは、SONG テストの標準化の過程で、訳文を見直し、(意味・目的を見出していないに関わらず)意欲の高さを強調する質問文に変更するなどの改善をすれば、構成概念妥当性が高まることも考えられ、今後さらなる検討が必要であろう。この意欲 (C) 因子が心理測定学上しっかりとしたものになることが、SONG テストの独自性を主張することにつながるものと思われ、PIL 研究会のさらなる検討を期待したい。

なお、心理的ストレスプロセスの中に、人生の意味や目的といった実存的な側面をどのように組み込むことができるか、といったストレス研究の文脈からいえば、今後、学業状況のストレスばかりではなく、他のストレス状況についての検討を行い、重回帰分析にとどまらず共分散構造分析によるストレスプロセスの検討まで進めていくことが必要であろう。

## 引用文献

- 千葉征慶 1993 PIL スコア (人生の意味・目的意識) のストレス緩和効果に関する一研究 経営行動科学, 第8巻, 第1号, 33-40.
- Crumbaugh, J. C. & Maholick, L. T. 1964 An Experimental Study in Existentialism: The Psychometric Approach to Frankl's Concept of Noogenic Neurosis. *Journal of Clinical Psychology*, Vol. 20, 200-207.
- Crumbaugh, J. C. & Maholick, L. T. 1969 *Manual of Instructions for the Purpose in Life Test*.

Psychometric Affiliates, Brookport, Illinois.

- Crumbaugh, J. C. 1977 The Seeking of Noetic Goals Test (SONG): A Complementary Scale to the Purpose in Life Test (PIL). *Journal of Clinical Psychology*, Vol. 33, No. 3, 900-907.
- Dyck, M. J. 1987 Assessing Logotherapeutic Constructs: Conceptual and Psychometric Status of the Purpose in Life and Seeking of Noetic Goals Tests. *Clinical Psychology Review*, Vol. 7, 439-447.
- Frankl, V. E. 1967 *Psychotherapy and Existentialism, Selected Papers on Logotherapy*. Washington Square Press, Washington. (フランクル, V. E. 高島博・長沢順治 (訳) 1972 現代人の病 丸善)
- Frankl, V. E. 1969 *The Will to Meaning: Foundations and Applications of Logotherapy*. The New American Library, Inc., New York. (フランクル, V. E. 大沢博 (訳) 1981 意味への意志—ロゴセラピーの基礎と適用— プレエン出版)
- Frankl, V. E. 1995 *Was nicht in meine Büchern steht, Lebenserinnerungen (2., durchges. Auflage)* (フランクル, V. E. 山田邦男 (訳) フランクル回想録 20世紀を生きて 春秋社)
- 神村栄一・海老原由香・佐藤健二・戸ヶ崎泰子・坂野雄二 1995 対処方略の3次元モデルの検討と新しい尺度 (TAC-24) の作成 教育相談研究, 第33巻, 41-47.
- Lazarus, R. S. & Folkman, S. 1984 *Stress Appraisal and Coping*. New York: Springer. (ラザルス, R. S. とフォルクマン, S. 本明寛・春木豊・織田正美 (訳) 1991 ストレスの心理学 実務教育出版)
- ラザルス, R. S. (講演) 林峻一郎 (編・訳) 1990 ストレスとコーピング—ラザルス理論への招待— 星和書店
- ルーカス, エリザベート 今井伸和 (訳) 2002 第1章 ログセラピー—フランクルの遺産 山田邦男 (編) フランクルを学ぶ人のために 世界思想社 12-27.
- 前川真由美 2002 ストレス過程におけるリフレーミングの位置づけの検討 岩手大学大学院・人文社会科学 研究科・修士課程, 社会科学専攻, 平成13年度修士論文
- 新名理恵 1994 心理的検査 *Clinical Neuroscience*, 第12巻, 530-533.
- Reker, G. T. & Cousins, J. B. 1979 Factor Structure, Construct Validity and Reliability of the Seeking of Noetic Goals (SONG) and Purpose in Life (PIL) Tests. *Journal of Clinical Psychology*, Vol. 35, No. 1, 85-91.
- 斎藤俊一・佐藤文子・田中弘子・千葉征慶 2001 SONG テストと PIL テストの関連 日本心理臨床学会第20回大会研究発表集, 252頁.
- 佐藤文子 (監修・編集)・田中弘子・斎藤俊一・山口浩・千葉征慶 (編集) 1998 PIL テストハンドブック システムパブリカ
- 佐藤文子 1998 第1章 PIL テストの理論的背景 佐藤文子 (監修) PIL テストハンドブック・第I部 システムパブリカ, 5-15.
- 島津明人 2002 3章 心理学的ストレスモデルの概要とその構成要因 小杉正太郎 (編著) ストレス心理学—個人差のプロセスとコーピング— 川島書店, 31-58.
- 鈴木伸一・坂野雄二 1998 認知的評価測定尺度 (CARS) 作成の試み ヒューマンサイエンスリサーチ, 第7巻, 113-124.
- 田中弘子・佐藤文子・斎藤俊一・山口浩 2004 SONG (Seeking-of-Noetic-Goals) テストの標準化に向けて(2) 東北心理学研究, 第53号. (掲載予定)
- 山口浩 1993 第3章「ケーススタディー—生きがいと PIL テスト—」の第1節~第3節 岡堂哲雄 (監修), PIL 研究会 (編) 生きがい—PIL テストつき— 河出書房新社 62-132.
- 山口浩・佐藤文子 1993 PIL テスト (実存心理検査) にみられる大学生の生きがい感 岩手大学保健管理センター紀要, 第19号, 5-16.
- 山口浩・佐藤文子・田中弘子・斎藤俊一 2000a SONG (Seeking-of-Noetic-Goals) テストの標準化に向けて(1) 東北心理学研究, 第49号, 1頁.
- 山口浩・佐藤文子・田中弘子・斎藤俊一 2000b SONG (Seeking-of-Noetic-Goals) テストの標準化に向けて—PIL テストとの関連および因子の検討— 日本心理学会第64回大会発表抄録集, 86頁.